

2 みどり市立学校の現状

(1) 学校規模の現状

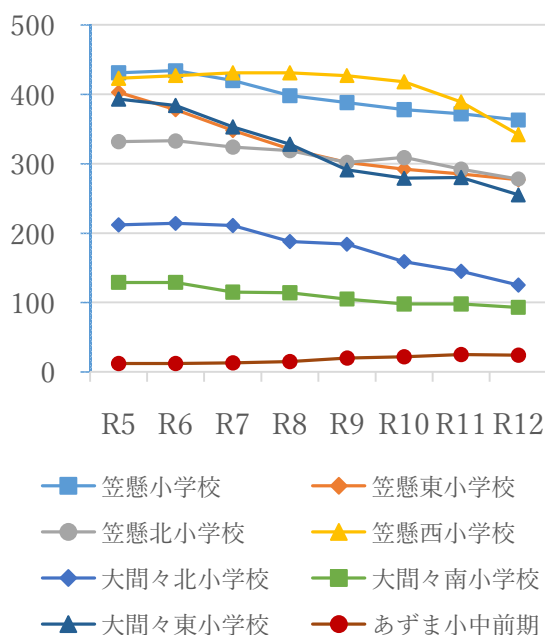
① 児童生徒数の推移と今後の推計

【小学校・義務教育学校前期課程】

	R5	R6	R7	R8	R9	R10	R11	R12
笠懸小学校	431	434	420	398	388	378	372	363
笠懸東小学校	403	378	348	321	302	292	285	277
笠懸北小学校	332	333	324	319	302	309	292	278
笠懸西小学校	423	427	431	431	427	418	389	342
大間々北小学校	212	214	211	188	184	159	145	125
大間々南小学校	129	129	115	114	105	98	98	93
大間々東小学校	393	384	353	328	291	279	280	255
あずま小中前期	12	12	13	15	20	22	25	24

- あずま小中学校（前期課程）を除いたすべての学校で児童数は減少傾向にある。
- 笠懸町と大間々町の差が大きい。
- 大間々北小学校、大間々南小学校の小規模校化が顕著である。
- 笠懸東小学校、大間々東小学校の減少率が大きい。

小学校児童数推移

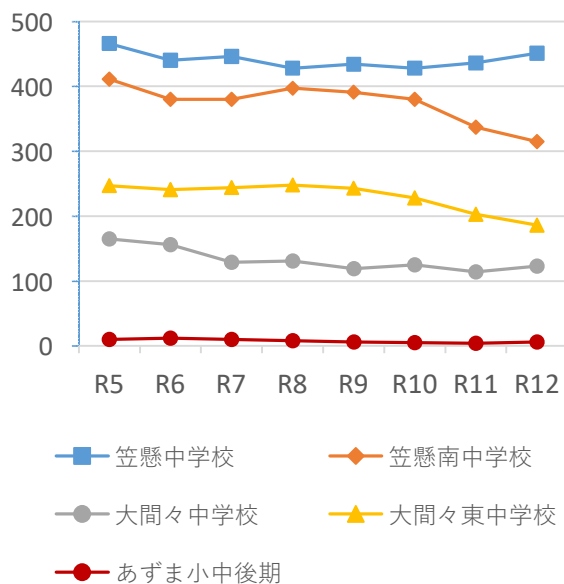


【中学校・義務教育学校後期課程】

	R5	R6	R7	R8	R9	R10	R11	R12
笠懸中学校	466	440	446	428	434	428	436	451
笠懸南中学校	411	380	380	397	391	380	337	315
大間々中学校	165	156	129	131	119	125	114	123
大間々東中学校	247	241	244	248	243	228	203	186
あずま小中後期	10	12	10	8	6	5	4	6

- 多くの学校で生徒数は減少傾向にある。
- 3つの町の生徒数に大きな差がある。
- 大間々中学校の小規模校化が顕著である。
- 大間々東中学校の減少率も大きい。

中学校生徒数推移



② 学級数の推移と今後の推計

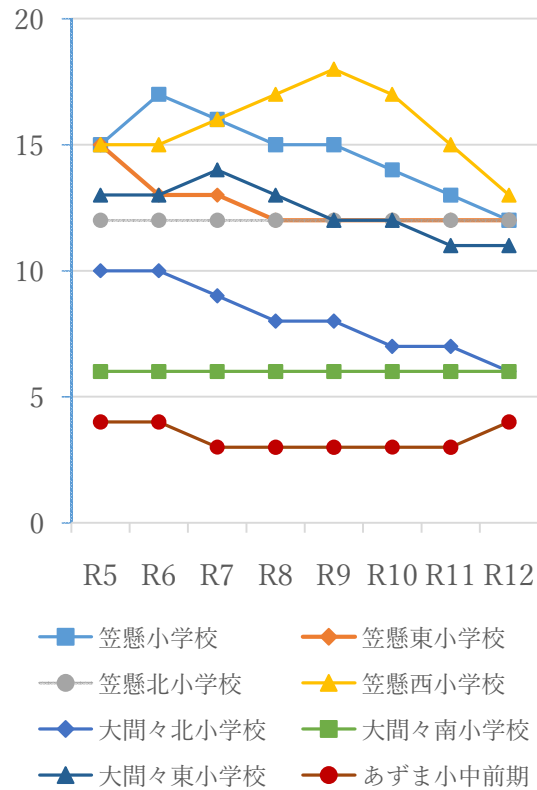
【小学校・義務教育学校前期課程】

	R5	R6	R7	R8	R9	R10	R11	R12	R12の学校規模
笠懸小学校	15	17	16	15	15	14	13	12	標準
笠懸東小学校	15	13	13	12	12	12	12	12	標準
笠懸北小学校	12	12	12	12	12	12	12	12	標準
笠懸西小学校	15	15	16	17	18	17	15	13	標準
大間々北小学校	10	10	9	8	8	7	7	6	小規模
大間々南小学校	6	6	6	6	6	6	6	6	小規模
大間々東小学校	13	13	14	13	12	12	11	11	小規模
あずま小中前期	4	4	3	3	3	3	3	4	過小規模

※学級数は、特別支援学級の児童数を所属学年の児童数としてカウントした場合のニューノーマル GCP (P.12 参照) による学級数。学校規模は、P.11 学校規模の分類参照。

- 多くの学校で学級数は減少傾向にある。
- 笠懸町と大間々町の差が大きい。
- 大間々北小学校と大間々東小学校の減少率が高い。
- 大間々南小学校に加え、R12 年度からは大間々北小学校も 1 学年 1 学級となる。
- 大間々東小学校も R11 年度より 1 学年 1 学級の学年が出てくる。

小学校学級数推移



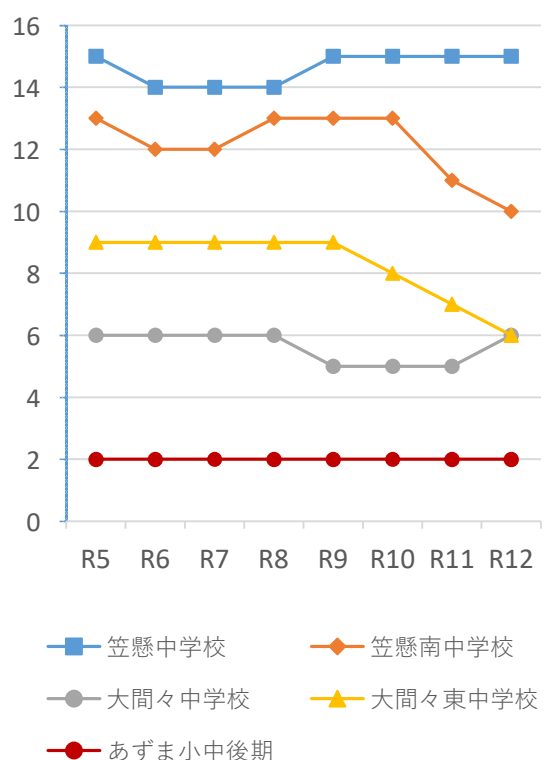
【中学校・義務教育学校後期課程】

	R5	R6	R7	R8	R9	R10	R11	R12	R12の学校規模
笠懸中学校	15	14	14	14	15	15	15	15	標準
笠懸南中学校	13	12	12	13	13	13	11	10	小規模
大間々中学校	6	6	6	6	5	5	5	6	小規模
大間々東中学校	9	9	9	9	9	8	7	6	小規模
あずま小中後期	2	2	2	2	2	2	2	2	過小規模

※学級数は、特別支援学級の児童数を所属学年の児童数としてカウントした場合のニューノーマル GCP (P.12 参照) による学級数。学校規模は、P.11 学校規模の分類参照。

- 多くの学校で学級数は減少傾向にあるが、笠懸中学校、大間々中学校、あずま小中学校（後期課程）の学級数は横ばいである。
- 3つの町の学級数に大きな差がある。
- 大間々中学校は R9 年度より 1 学年 1 学級となる学年が出てくる。
- 笠懸南中学校、大間々東中学校の学級数減少が顕著である。

中学校学級数推移



② 大間々町の適正規模及び適正配置

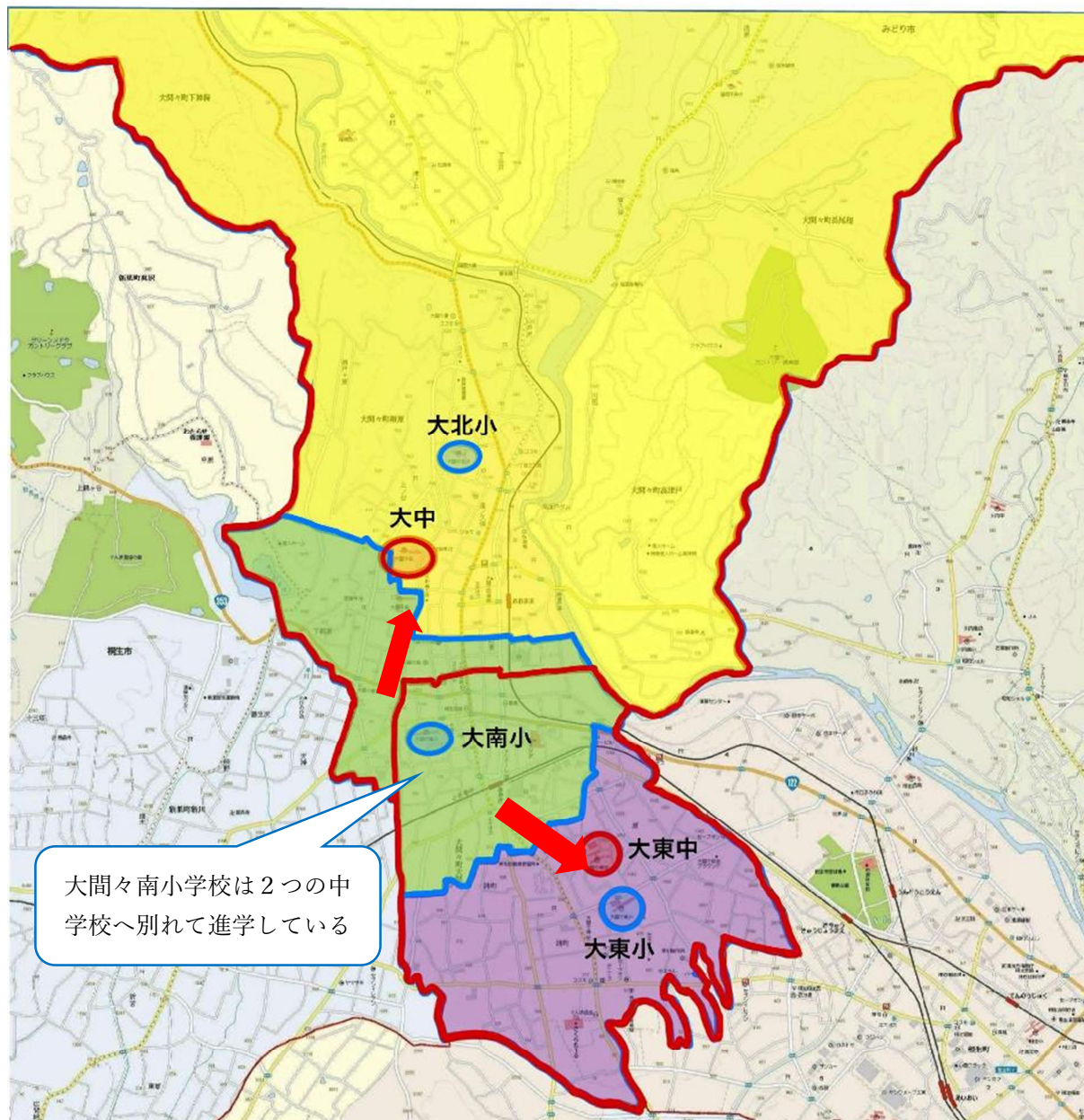
※学校規模に課題があり統廃合等に伴う学校配置の検討が必要である。

令和6年度 みどり市大間々町 小学校区・中学校区

— 小学校区の境界 — 中学校区の境界

※小学校区のみ色分け

(現在の学校区)

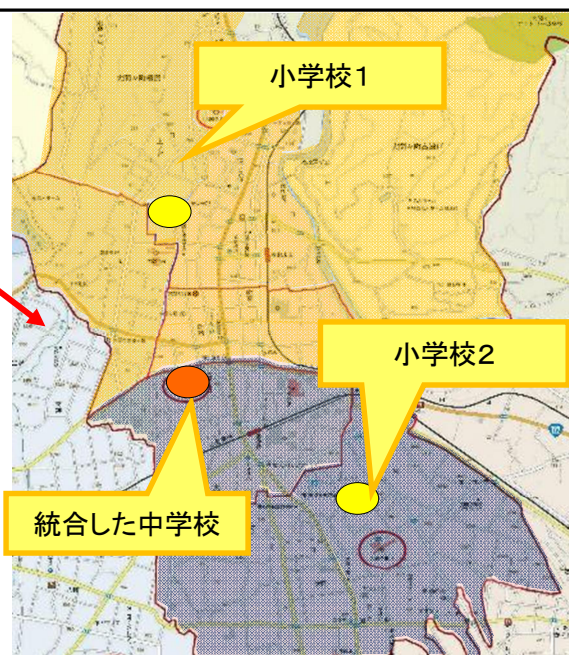


- ・現在の大間々町における小学校区と中学校区を見ると、大間々南小学校の児童は、進学時に2つの中学校へ分かれていることが分かる。
- ・一方、大間々東小学校や大間々北小学校の児童は全員がそのまま中学校へ進学するため、大間々南小学校の児童は大きな集団の中に入っていくことになり、中学校への入学当初の精神的負担が大きいと考えられる。

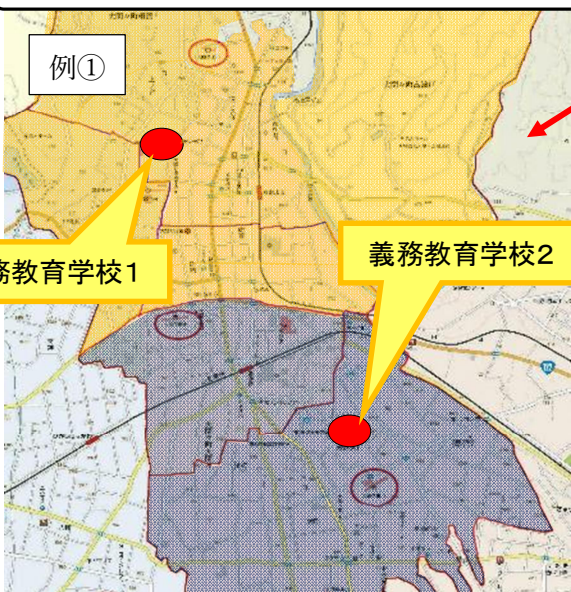
【適正規模及び適正配置の例】

小中学校を統合し、小学校2校、中学校1校へ適正化した場合の例

- ・最終的な形の例として、右図のように大間々地区に小学校2校、中学校1校へとすることも考えられる。
- ・この場合、例えば統合した中学校を現在の大間々南小学校の跡地を使うと右図のように配置バランスが整うと考えられる。
- ・小学校2校は、現在の大間々北小学校と大間々東小学校を使うこともできるし、より町の中心部に近い大間々中学校と大間々東中学校の跡地を利用することもできる。
- ・小学校は、地域とのつながりが強いため、小学校は小学校として残し、社会性を学ぶ時期である中学校は統合し、生徒数、学級数を確保することも必要ではないかと考えられる。



小中学校を統合し、義務教育学校へと移行した場合の例



【例①】最終的に義務教育学校2校とする例

- ・将来的な統廃合を考える場合、例えば左図の例①のように義務教育学校2校を最終的な形とすると通学時間・距離も北部地域を除いて適正となる。（北部は引き続きスクールバスによる送迎）
- ・義務教育学校へ移行することで、一定の学校規模や教員数が確保され、メリットが大きくなる。

【例②】最終的に義務教育学校1校とする例

- ・右図のように、大間々地区の小中学校を統合し将来的に1つの義務教育学校とする場合、大間々地区の中心に近い場所にある大間々南小学校跡地を利用することも考えられる。
- ・この場合、学校規模や教員数は確保されるが、通学距離・時間・方法については対策が必要である。
- ・大間々地区の歴史的背景や地域コミュニティ、災害時等の避難所機能などを考えると大間々地区に学校が1つだけになることについては、地域住民等と十分に協議を重ね、理解と協力を得ることが必要である。

